

連載

小惑星探査機「はやぶさ」の感動から天文教育へ【5】

「はやぶさ」はなぜ

愛される探査機になったのか？

～広報戦略と状況からみる、「はやぶさ」のスターへの道～

(前編)

寺 蘭 淳也 (会津大学)

1. はじめに

2010年6月13日以降、「はやぶさ」はまさに、日本のトップスターといってもいい道を歩んでいる。それはただ単に、宇宙が好きな人が騒いでいる、というレベルではない。

「はやぶさ」がどれだけ日本人に受け入れられ、好まれているか、ということについては、さまざまな事実や数字が示している。最近でいえば、帰還以降に映画が3作構想され、そのうち、2011年10月1日に公開された映画「はやぶさ」が、好感度ナンバーワンを記録した[1]ということからもおわかりであろう。とにかく、過去の宇宙開発、宇宙探査における記録を、ありとあらゆる面で塗り替え、未知のゾーンへと私たち(宇宙開発関係者)を導いているのが、「はやぶさ」である。

ではあるが、では、なぜ「はやぶさ」はそんなに有名になったのであろうか。ただ単に、帰還時の光を見ただけで、日本中にこれだけのファンが生まれたのであろうか？そうではない。実は、7年間にわたる探査の中で、周到かつ地道に作られた広報戦略があり、その中で「はやぶさ」が有名になったことこそが、最後の帰還時の「光」によって一気にスパークした、そういう見方ができるのである。

ここでは、「はやぶさ」の広報戦略・広報実施経緯を振り返り、これから先の宇宙開発、ないしは科学に関する広報体制でどのような

ことが必要なのかということについて考察していきたい。

2. 2003年の宇宙開発

「はやぶさ」が打ち上げられた2003年は、日本の宇宙開発が大きく変わった年である。この年の10月、それまで宇宙開発事業団(事業団、NASDA)、文部科学省宇宙科学研究所(宇宙研、ISAS)、そして航空宇宙技術研究所(この時点では独立行政法人。航技研、NAL)となっていた、宇宙開発に関する3つの組織が統合され、「宇宙航空研究開発機構」(JAXA)として生まれ変わったのである。

「はやぶさ」の打ち上げは2003年5月9日。従って、打ち上がってから半年も経たないうちに、運用組織の名前が変わってしまったのである。ただ、組織は一緒になったとしても、当事者同士ではお互いの組織についてはあまり知らない、という状況ではあった。例えばNASDAの人たちは宇宙研のミッションをあまり知らず、ISASの人たちは「NALって何？」というところから始まり…という状況であった。まして、まったく新しい名称の組織である。JAXAの広報が最初に直面したのは、「JAXA」(ジャクサ)という名前を徹底して覚えてもらうことであった。とはいえ、当時でさえ関心がそれほど高くなかった宇宙開発、ましてや宇宙科学という分野を人々の

記憶に残らせるということは、非常に難しい話であった。もちろん、「はやぶさ」という探査機も、この当時は、まさに知る人ぞ知るといふ段階の、無名の探査機ともいってよい存在であった。

しかし、JAXA 発足直後の道のりが、そのすべてを狂わせてしまう。2003年10月、地球観測衛星「みどり II」が、突然のアクシデントで機能停止。原因は太陽電池パネルの故障と結論づけられたが、打ち上げからたった9ヶ月での故障に、世間からは「税金の無駄遣い」との非難が殺到することになる。

そして、11月29日。この日、2機の情報収集衛星を搭載して打ち上げる予定だったH-IIA6号機は、打ち上げ途中で固体ロケットブースターのうち1機を切り離すことができなくなり、このままミッションを達成できる見通しが無いとして指令破壊されることとなった。2機の情報収集衛星の開発費用は合計して約1100億円。1ヶ月前の「みどり II」の事故と合わせて、発足直後のJAXAにはより大きな非難の意見が押し寄せた。当時広報部にいた私が受け取ったメールも「JAXAは解散しろ」「技術者は全員クビにしろ」などという過激な文面のメールが何通も寄せられた。

さらに、その10日後、1998年に打ち上げられ、その後の故障のため機能がほとんど停止していた火星探査機「のぞみ」が、火星への衝突を避けることを目的として、火星への周回軌道に入らず、そのまま火星を回って人工惑星となるコースに移行させられた。これもミッションの失敗として大きく報道されることとなり、上記2件と合わせて、発足直後のJAXAのイメージをどん底まで失墜させることとなってしまった。

一方で、2003年の10月には、中国が初の有人宇宙飛行を「神舟5号」で成し遂げている。つまり、発足してからのたった3ヶ月の間に、これも加えると、JAXAに対しては4

つもの大きなできごとが降りかかっていたといっても過言ではない。

まさに、日本の宇宙開発は2003年に危機的状况に陥っており、日本がこれから先宇宙開発を続けるべきなのかどうかという議論もなされるなど、今後、JAXAはもちろんのこと、宇宙開発という分野が日本において存続できるかどうかという瀬戸際に立たされてしまったのである。

3. 組織を元気づける

また、3機関の組織統合という点も、実はJAXA全体の活力を失わせる方向につながっていた。3機関統合の方針は2000年頃に示され、2001年から各機関において具体化されていった。しかし、それぞれが数十年にわたって運営されてきた組織を統合するという作業はそう簡単なものではない。しかも、統合のタイムスケジュールは決まっており、その日を過ぎるということはできない。結果として、職員の多くは統合に向けた作業に忙殺されることになり、ミッションの遅れや職員の士気低下などを生むことになった。

一方、組織統合によって幸いだった点もある。例えば、JAXA広報部に新たに、広報参与として、的川泰宣・宇宙科学研究本部教授(当時)が加わったことである。宇宙科学、そして宇宙開発にも造詣が深く、宇宙研において長年広報を実施してきた的川氏が、JAXA広報全体を引っ張ることにより、これまでどちらかというと型どおりの(例えば、プレスリリースを出して終わり、といったような)広報から、より宇宙研型の幅広い広報へと、JAXAの広報活動がモデルチェンジするきっかけが生まれた。

2003年12月時点で、「三重苦」に見舞われていたJAXAにとって、どん底からの広報活動はまさに手探りの試みであった。最初に決まったことは、徹底的な情報開示である。

H-IIA6 号機や「みどり II」の事故に対して発表される資料は、これまでのプレスリリース以外にも可能な限りウェブに出すように試みた。一方で、日本のロケットが低予算で開発されている実態や、他国からみても成功率が高いという点についても、実際の資料を基に説明を行った。いわば、数字による説得も同時に行っていたわけである。このような試みは、当初から時間がかかるということはわかっていたが、それでも、1つ1つを着実に積み重ねて、世論を醸成していくことが、組織防衛よりも優先するという方向性が、我々広報スタッフの間では一般的であった。そんな中で、2004年を迎えることになる。

4. 地球スイングバイ

前章でも述べたが、JAXA 職員の士気、とりわけ技術者たちの士気低下は本当に深刻であった。彼らこそが JAXA の未来を担うのにもかかわらず、このままではさらなる失敗を繰り返しかねない、というのが私自身の思いであった。一方で、JAXA という形で組織は統合されたにもかかわらず、職員たちは、他の組織に属する人(当時は 4 本部制を敷いていたので、他の本部といってもよいが)たちがどのようなことを行っているのか、ということほとんど知らないという状況であった。

私のように宇宙研と NASDA 両方にいたという人はまれで、お互いがお互いのミッションを知らないという状況にもあったのである。そこで、私たちが考えたのは、まず職員、すなわち「中の人」を元気にすることであった。次に、JAXA が 1 つの組織であり、その中にはすばらしいミッションを続けている人たちがいるということ、組織の多くの人たちに知ってもらおうという思いも生まれてきた。そのタイミングで出てきた格好の材料が、2004年5月19日の「はやぶさ」地球スイングバイであった。

地球スイングバイは、地球の重力を利用して、探査機を加速[注 1]させることである。極めて微妙な軌道制御が必要であり、またイオンエンジンを推進力とする探査機が地球スイングバイを行うということは史上初の試みであった。ただ、打ち上げなどに比べると、スイングバイについては事前に綿密な軌道設計やマニューバ(軌道変換)が実施されるため、成功する確率は非常に高いということは間違いなかった。

そのため、あえて成功することが確実として、このイベントを広報の観点から効率的に使うことが考えられた。私が代表を務めたウェブ広報チームでは、綿密な形で、この「はやぶさ」地球スイングバイをショーアップ化すべく、作戦を練っていった。

まず、1ヶ月前の4月20日頃より、JAXA トップページのトップバナー(当時は Flash を使用していた)に、このスイングバイについてのティザー広告とも呼ぶべきムービーを据えた。あくまで情報を減らし、スイングバイという文字を前面に打ち出す内容で、これを見た多くの人は「スイングバイって何?」という言葉と共に、JAXA が何かをやる、ということを感じ取ったはずである。

ゴールデンウィークが明けた頃から、徐々に開示内容を増やしていき、この「はやぶさ」スイングバイの技術的な概要を明らかにしていった。特に「秒速 9 キロで直径 1 キロの的を射抜く」といったような表現は、一般人だけでなく、JAXA 職員にも、その技術的なすごさをアピールすることに役立った。

そして、5月19日当日は、データアップロードのための特別な体制を敷くこととなった。当時は通常、JAXA ウェブサイトにおいて JAXA が公式に発表する内容(プレスリリース)は、事前に文部科学省のチェックを受けることが通例であった。しかし、今回取得した写真をプレスリリースの形を通して公開して

いたら、1 日以上遅れてしまい、結果的に JAXA の情報公開の遅さをいわれてしまうであろう。

そのため、事前の的川参与の力添えを得て、文部科学省をはじめ、JAXA や ISAS の情報公開・広報部署と協議しておき、写真が発表された時点で、事前の手続き通りにできる限り早くウェブサイト上で公開することを了承してもらった。

19 日当日は、私も「はやぶさ」管制室内に朝から陣取り、写真公開の準備を行った。そもそも私自身、「はやぶさ」のカメラ(理学カメラ=AMICA)のチームメンバーでもあり、私自身が画像処理を行っても構わなかったのだが、今回は、私自身は広報に専念することとし、カメラチームのリーダーでもある齋藤潤氏(現・東海大学)と、画像処理を担当したリモートセンシング技術センターの山本彩氏の協力を得て、画像作成を迅速に行うことができた。

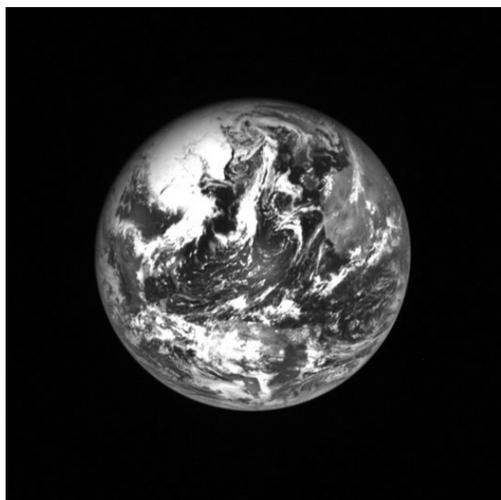


写真 1 2004 年 5 月 19 日の「はやぶさ」地球スイングバイの際に撮影された地球
(出典: [2], Copyright: JAXA)

そもそも、受信した画像はフィルタに分かれていることから、疑似カラーの画像を生成するためにも多少の時間が必要であった。そのため、この 2 名の迅速な作業がなければ、当然ながら迅速な公開はおぼつかなかった。

写真ができ次第、その写真を USB メモリに入れ、ISAS 内の該当部署を走り回りながら許可をもらい、最終的に JAXA 広報部のウェブチームへと送付したのをよく覚えている。画像作成が終了したのが朝 9 時半、そしてウェブにスイングバイ時の地球の画像が掲載されたのが正午頃。実にたった 2 時間半で、探査機から得られた画像が、公式ウェブサイトのトップを飾ったのである。これは、JAXA として実に画期的なできごとであった。

その後も、探査機から降りてくる画像を順次管制室内で処理し、その画像をウェブチームに届けるという作業を繰り返し、その日のうちに地球再接近時の写真数枚をウェブへとアップロードすることができた。この写真には多くの反響があった。もちろん、現在の「はやぶさ」ブームに比べればかわいいものといえるかもしれないが、メールで「まるで『はやぶさ』に載っているような感覚が得られた」というコメントが寄せられたときには、今回の作戦が報われたと思ったものである。

また、的川先生の個人的な縁から、気象予報士の森田正光氏がこの写真に興味を示してもらえたこともあり、その日の夕方には、「はやぶさ」が撮影した写真をもとにした森田正光氏による天気解説が行われた。当時は気象衛星が不安定という状況下でもあったことから、日本列島の南にある 2 つの台風がくっきりと写っている「はやぶさ」の写真が、図らずも気象写真としての役割を果たしたことになり、「はやぶさ」は世界ではじめての、気象予報に使われた月・惑星探査機となったのである。



写真 2 「はやぶさ」地球スイングバイ時に撮影された日本周辺。日本はちょうど梅雨前線の中で、ほぼ全土が雲の中である。写真下側に台風が2つ写っている。出典：[3]

地球スイングバイの一連の広報活動を通じて、迅速な情報公開は多くの人の支持を得る、ということ、私たちだけでなく、広報に携わる上級職を含めたすべての人が認識することになった。また、スイングバイの前後にはウェブサイトのアクセスは少し増加したが、その多くが内部から見に来ているということもわかり、この一連の広報活動が、内部への広報にも寄与した、ということも確認できた。このスイングバイ時の広報活動の成功が、その後、翌年のタッチダウン広報へとつながっていくのである。

5. 「2005年」が持つ意味

2005年は、日本の宇宙開発にとって象徴的な年になった。

まず、なんといってもペンシルロケットの発射からちょうど50年であった。このことは、広報参与であった川先生が、ご自身の思い入れもあったのかと思うが広報として大きく取り上げるように流れができていった。

また、2003年に空中分解事故を起こして以来のスペースシャトルの打ち上げ、特に野口聡一宇宙飛行士の搭乗も大きな話題であった。2月には、H-IIA7号機の打ち上げ(失敗以来はじめての打ち上げ)も行われた。

こうして、いろいろなことがある2005年の最後を締めくくるのが、「はやぶさ」の小惑星イトカワへのタッチダウン、というタイムラインになっていた。もちろん、「はやぶさ」自身はイトカワを7月くらいには確実にとらえるはずなので、実質的に動きが始まるのは、夏頃からということになっていた。

小惑星「イトカワ」と、ペンシルロケットの創始者糸川博士。偶然ではあるのだが、それが50年という歳月を飛び越えて結びついたということは、まさに大きな広報チャンスともいえるタイミングであった。

とはいえ、「はやぶさ」のような小さなチームに、広報チームと呼べるような存在は全くなかった。たまたまJAXA広報部にいた私が、「はやぶさ」チームにも属していて、間を取り持ちながら中継していた、というのが実態であった。しかし、これでは、タッチダウンで予測されるような各種の事態には対応が難しい。そこで、一応曲がりなりにも広報チームと呼べる体制を作ることになった。とはいえ、ミッションそのものの規模から考えて、それほど大規模なチームを作るということは考えられなかった。

「はやぶさ」広報チームは、基本的に私、川口先生、そして齋藤潤氏の3人がメンバーとなることになった。カメラ担当が広報担当となるのは、おそらく、プレスリリースなどをはじめとして、メディアに流れる映像はカ

メラで撮影されたものが多いと予想されたことからである。これは、2004年の地球スイングバイの際の教訓を踏まえたものであり、最終的にはその予想がぴたりと的中したわけである。

川口先生はミッションの統括でもあり、また広報の統括でもあるという立場である。私は、広報担当者として、実際の業務のほか、宇宙研広報(対外協力室、及び庶務課広報担当)との調整、及び、自身も属する JAXA 広報部との調整も含まれていた。なお、対外協力室で動いて下さったのは、的川先生であることはいうまでもない。

ここで、JAXA の広報体制について若干説明する必要があるだろう。2005年当時、JAXA には、まず JAXA 全体の広報を統括する部門として、JAXA 広報部が存在していた。そして、各本部(当時は4本部体制)に広報部署が存在していた。さらに、例えば宇宙研のようにミッションがそれぞれの広報体制を持っているところもあった。すなわち、「はやぶさ」広報は、3層体制で走っていたことになる。

このように一見すると複雑な広報体制になった理由は、1つには、統合された当時の旧組織の広報部門をそのまま残したことにある。それぞれを統合しようにも、既に膨大な業務、コンテンツを抱えているために、本部への統合は難しいことになってしまう。そのため、既存の各本部の広報をそのまま活かす形で、本部は全体統括や組織間調整を行うことがメインとなっていた。

また、各ミッションでも広報を持っており[注2]、大きなミッションを持っているところはそれ自身が非常に大きな広報を行っていた(例えば、ISSなどがそうである)。「はやぶさ」も、当初はミッションチーム自身が広報を行う方向性も考えられたのだが、人的なリソースの不足などから、最終的には、宇宙研

の対外広報をメインとする形とし、重要な発表については本部(JAXA 広報部)との調整の上、そちらでも発表を行う形とした。どちらでどのような内容を発表するかは、その都度私が調整を行うような形になっていた。

6. イトカワ到着前後の広報

「はやぶさ」のイトカワ到着に関する広報が本格的にスタートするのは、イトカワを「はやぶさ」が捉えた7月下旬以降である。宇宙研のウェブサイトでは、2005年8月15日に、イトカワの撮影を行ったというトピックスが流れたのが最初[4]である。

この後、次第に「はやぶさ」のイトカワ接近についてのトピックスが増えていく様子は、宇宙研の2005年のトピックス一覧[5]、あるいは月探査情報ステーションの「はやぶさ」関連リンクのページ[6]でみることができる。そして、9月12日に、「はやぶさ」はイトカワに到着するわけである。この前後一連のトピックスは、いずれも川口先生が直接書いているものが多い。中には非常に長い記事もあるが、多くは川口先生が直接執筆し、私と齋藤氏が最終的にチェックをした上で、広報部門へと送付している。

通常、プレス向け資料は広報担当者が作成し、それを探査担当者がチェックして送り返して公開されるものであるが、こと「はやぶさ」に関しては、川口先生のトップダウン体制が広報にも発揮され、結果として非常にスピーディな情報公開が可能となったことは間違いない。もし通常のようにいちいち広報担当者とのやりとりを続けていたとしたら、それだけで何時間、あるいは何日という時間をロスし、タイムリーな広報活動、あるいは情報提供は不可能であったと思われる。もちろんそこには、文部科学省などとの調整を水面下で行っていたと思われる的川先生の尽力も忘れてはならないだろう。

川口先生の実稿は、もちろん日本語だけでなく、英文の発表文にも及んでいる。プロジェクトマネージャが自ら筆を執って広報文も書き、またミッション自身も指揮するという体制で、正確性が担保された情報がミッション中心から出てくるという理想的な体制が生まれた。また、担当者は必要なデータ(画像ファイルなど)の提供と文章チェックといった周辺体制を固めればよく、またそれに集中することができた。このような体制が、タイムリーなタッチダウン広報体制を生み出せる大きな要因であった。

さて、この頃のトピックス文章をよくみると、必ず出てくる項目がある。「ウェブ上データの利用方針について」[7]というものである。これは、既にかなり注目されていたミッションである「はやぶさ」について、海外の研究者が、プレス公表されたデータから研究活動をはじめてしまうことを牽制する目的で設けられたリンクである。それを示す項目が、3.と4.である。

3. JAXA は、本ページのいかなるデータについても正確に校正済みであることを保証するものではなく、また自身の目的のために意図してそれらを修正、改造を行う権利を有する。

4. 本ページのいかなるデータを、雑誌、論文等により科学的あるいは学術的な出版を行うことは、JAXA と事前に調整され承認を得なくてはならない。JAXA は承認なしに引用されたデータの正確さを保証しない。すべての科学的あるいは学術的な出版に関する権利は、プロジェクトで規定されている『「はやぶさ」データポリシー』に準ずる。

当時、かなり高い解像度のデータを公開してしまうことについてはミッションチーム(川口先生を含む)からも心配の声があったこ

とから、そのデータが科学的校正を行っていないことを示す意味も込めて、この注釈がつけられていたのである。

7. タッチダウン広報 ～「栄養ドリンク」神話はこうして生まれた～

そして2005年11月、いよいよタッチダウン広報が開始されることとなった。当初、プロジェクトメンバーから誰かがスポークスパーソンとして出て、宇宙研の特設記者会見場(宇宙研で最も広い、本館2階の会議スペース)で解説するということも考えられた。しかし、ミッションメンバーはそもそもそれほど数もおらず、また1人1人やることも非常に多い。そのことを考慮し、今回の広報は、管制室からのブログ発信で状況をセミリアルタイムで伝え、管制室の様子については、中継カメラで記者会見場、さらにはインターネットへと流すという方向となった。また、随時的川先生が管制室へと来訪し、状況を伝えて記者会見場に戻り、いわばメッセンジャーとなって現状を伝える役割を果たしていた。[8]

ただ、この「管制室生中継」に関しては大



写真3 2005年11月1日に行われた、これまでの探査の総括と今後のタッチダウンへ向けた計画についての説明の記者会見(筆者撮影)。

きな問題点があった。実際、管制室ではいろいろな決定がなされるため、それがそのままインターネットで伝わってしまうというのは避けたいという意見がプロジェクトチームから出されていた。そのため、最終的には音声を入れず、固定したアングルのカメラにより、管制室の状況を遠景で中継するという形で決着することとなった。

タッチダウンの状況を随時ブログで伝えるという、ほぼリアルタイムでミッションの状況を告知は、JAXA はもちろん、宇宙研としても初めての試みではあった。しかし、11月の時点で「はやぶさ」は非常に大きな注目を浴びており、その状況をプレスリリースではなく、リアルタイムで伝えるということに非常に大きな意義があるということ、広報統括でもある的川先生をはじめとした多くの人が認識していたといえるだろう。

実際、タッチダウンはいくつもの複雑な工程に分かれる。従って、もしそれぞれの行程ごとにどこかでプレスリリースを出すような形にしていたとしたら、まずミッションチームとしても非常に煩雑な手続きを行わなければならない(どこかのタイミングごとにプレスリリースの協議を行うような形だろう)、非常に大事なところでミッションの人的リソースを消耗することになりかねなかっただろう。

とはいっても、実際何が起こるか、ということとはわからなかった。また、最悪の事態も起こりうることは当然のことながら考えられた。しかし、このブログチーム(私と齋藤氏)は、ある種全権を委ねられて文章や写真の掲載を行っていた一方で、必ず肝心な部分は川口先生の了承を得ながら更新を行っていた。そして、メンバーは管制室という狭い空間にいたため、判断も即時行うことができた。これがもし、相模原と丸の内、といったような離れたやりとりだったら、例え電子メールやテレビ会議などを使ったとしても即時のコミ

ュニケーションを取ることが不可能であっただろう。小さいチームが1つの場所で、ミッションと広報を同時に進行させていたことが、あのスリリングなタッチダウン時のブログの源泉になっていたといえる。

そして、タッチダウン広報ではいまや伝説的な存在になっているあの「リポビタンD」であるが、これも、上記のような広報体制の元での活動であったことが下敷きになっているといえる。

ブログチームは、肝心なところについては川口先生の了承を得ながら更新作業を進めていたが、逆にそれ以外の部分は全権を委任されていたこともあり、比較的自由に更新を行うことができた。

ブログといっても、午後11時から翌朝7時までかかる長丁場の着陸過程において、ただ何かあったときにぼつりと更新するのでは、ずっとみている人たちも退屈してしまうであろうし、逆にこれだけ注目を浴びているタイミングを利用して、管制室などの様子を紹介したりして、ミッションをなるべく身近に感じてもらいたい、そういう気持ちも働いていた。そのため、例えば「差し入れが入りました」とか、「お守りがあります」といったような、ちょっと気持ちを休めることができるような話題も適度に入れながらブログを更新していた。ポイントは、定期的に何らかの話題を入れることで、来ているユーザを飽きさせない、という考えであった。「リポビタンD」はその延長線上であり、最初はたまたま写したブログブースの写真に瓶が写っていることが話題になっているという知人からのメールでスタートしていったのである。

その後は、知人などの助けも借り、ネットの反応をみながら、話題が出やすい方向でいろいろな話題を探っていった。第2管制室へ情報を伝えるカメラの存在、夜中に管制室で議論する研究者の姿、いろいろなドラマや設



写真 4 ブログを更新する 2 人の脇に写る「リポビタミン D」の空き瓶が次々に増えていくさまは、ネット上で話題となり、パロディの絵や動画まで出るようになった。いまやリポビタミン D は、宇宙開発ファンの間では「宇宙開発公式ドリンク」とまで呼ばれている。

写真はいずれも「Hayabusa Live」[9]より（但し画像そのものは筆者所蔵のもの）。

備の存在と共に、「瓶」の写真も写し込むことで、当時は意識していなかったものの、「がんばる人」の姿を印象づけることはできたのではないと思う。そしてその作戦は当人たちが思っていた以上に成功したといえるだろう。

このように、「はやぶさ」の広報は、小さなチームの中で、小回りのきく方法、そして現場に最大限の裁量を与えるという方式が功を奏したといえるだろう。そして、随時出てくる情報に一喜一憂する中で、次第にファンが増え、注目度が高まり、最終的に 2005 年 11 月のタッチダウンへと、大きな盛り上がりを見せていくのである。

もちろん、「はやぶさ」のミッション自体の魅力—行って帰ってくる、ということ—が人気を博していることは間違いない。しかし、どのようなミッションであっても、それを知ることがなければ、誰もそこに気付く人はいないのである。実際、2003 年 5 月の打ち上げ時には、「はやぶさ」はマニアこそは知っていても、どちらかという地味なミッションであった。

そして、この広報が、「はやぶさ」の試練を経て、やがて帰還へとつながっていく。この点については、広報全体の総括、及び今後の探査広報への提言なども含めて、次回にまとめたい。

注 釈

[注 1] 探査機の目標天体への投入方向によっては、減速させることも可能である。

[注 2] そのため、2005 年には、「はやぶさ」のミッションチームウェブサイトも作成された。その名残は、現在でも <http://www.hayabusa.isas.jaxa.jp/> というサイトの存在に示されている（なお、現在では限定された人しかアクセスできないサイトとなっている）。



写真5 タッチダウン時に出回ったパロディ。上は「2ちゃんねる」の書き込みに出たアスキーアート。下はインターネットで出回った、ブログ書き込みの絵のパロディ。右側にレッドブル(欧米でよく飲まれている「エナジードリンク」)の絵があることから、おそらくは外国の人の手になるものと思われる。

文献

- [1] 「はやぶさ君がんばれ！」映画『はやぶさ/HAYABUSA』が満足度ランク首位 (ぴあ)
<http://cinema.pia.co.jp/news/156680/43897/>
- [2] JAXA 宇宙科学研究所トピックス、
<http://www.isas.jaxa.jp/j/snews/2004/0519.shtml>
- [3] JAXA 宇宙科学研究所トピックス、
http://www.isas.jaxa.jp/j/snews/2004/0520_3.shtml
- [4] JAXA 宇宙科学研究所トピックス、
http://www.isas.jaxa.jp/j/snews/2005/0815_hayabusa.shtml
- [5] JAXA 宇宙科学研究所トピックス(2005年・目次)、
<http://www.isas.jaxa.jp/j/topics/topics/2005.shtml>
- [6] 「はやぶさ」関連リンク(月探査情報ステーション)、
<http://moonstation.jp/ja/hayabusa/links.html>
- [7] <http://www.isas.jaxa.jp/j/enterp/missions/hayabusa/policy.shtml>
- [8] 的川泰宣、小惑星探査機はやぶさ物語、NHK 出版(生活人新書)、2010
- [9] <http://www.isas.ac.jp/home/hayabusa-live/>

寺蘭 淳也 (会津大学)